

生活科と言葉の力

具体的な活動
や体験

生活科では、具体的な活動や体験を重視しています。しかし、活動のみ、体験のみの生活科に終わることを意味しているわけではありません。

言語活動

児童に、活動したり体験したりしたことを、言葉を中心としたコミュニケーション活動により交流させる。つまり、言語活動を充実させた生活科が、これから重要になってきます。

気付きの質

活動したり、体験したりしたことを言語活動によって他者と交流することは、思考を促し、気付きの質を高めると考えているからです。

具体的に、次の例をご覧ください。

児童は、自分が調べたことを伝え合う活動を行っています。
「友達が調べているあのお店の人、早起きしてがんばっているんだ。」

そして、自分が発見したと友達が発見したことを比較して、似ているところを見つけます。

「わたしが調べているお店の人は、ほかにどんなことをがんばっているのかな」

この児童は、交流により、新たに調べたいことを明らかにし、再び地域に出かけていくことでしょう。

このように、互いに伝え合い交流する活動は、集団としての学習を高めるだけでなく、一人一人の気付きの質を高めていくことになるのです。



ここからは、生活科と言葉について少し詳しく見ていきましょう。

言葉と活動や体験の関係

言葉と活動や体験の関係を整理します。生活科では、言葉と活動や体験の両方の矢印を大事にしなければいけないということです。活動や体験は言葉を豊かにするし、言葉は活動や体験を豊かにしてくれるという、お互いを高め合う関係にあるということになります。

言葉



高め合う

活動や体験

具体的に、次の例をご覧ください。

活動や体験が言葉を豊かに、言葉が活動や体験を豊かにすること

カブトムシを幼虫から成虫にするまで、楽しみながらがんばって育てた経験を持つ子どもは、「カブトムシ」という言葉自体に重みを持ちます。背景が全くちがう言葉になったということです。体験が豊かになると、言葉も豊かになるわけです。また、語彙も増えていくでしょう。

活動や体験を重ねるうちに、友達や先生などと話す機会が増えます。活動や体験によって、伝えたいことがいっぱいできるからです。結果として、交流が盛んになればなるほど、新たな目当てができて、次の活動も生まれます。



無自覚だった気づきを自覚

活動や体験したことを言葉で表すことは、自分とのかかわりを見つめ直すことになり、自分自身への気づきを自覚することになります。

例えば、次の例をご覧ください。

言葉により気づきを自覚すること



活動や体験にインパクトがあればあるほど、子どもたちは圧倒されて、気づきがあったとしても無自覚に終わることが多くあります。そこで、子どもたちに交流の機会を与えると、話し合い、伝え合い、それぞれを比べたり、特徴を見つけたりします。今まで、はっきりしなかったことが明確に自覚できるようになり、気づきもはっきりし、質的にも高まっていきます。

活動中に、振り返りの場面を設定することはまずありません。児童が、活動や体験に熱中していて没頭しているからです。そして、活動後に冷静になった子どもたちに振り返りの機会を与えます。子どもたちは、頭の中にあっという間の気づきを整理して表現します。無自覚だった自分の気づきを自覚する瞬間です。そして、気づきの質もどんどん高まっていきます。



言葉の力の育成を意識した生活科の授業づくり

○ 活動や体験の充実

生活科では、言葉の力を育成するために、活動や体験を充実することを大切にしてほしいと考えます。質の高い充実した活動や体験をした児童は、伝えたくて仕方なくなり、次々と語っていくでしょう。

○ 多様な学習活動を工夫

具体的な活動や体験を通して、気付いたことを基に考えさせるために、「見付ける、比べる、たとえる」などの多様な学習活動を工夫してほしいと考えます。一つ一つの気づきは、多様な学習活動の中、言葉により関連づけられ、質的に高められます。

○ 話し合い活動の充実

一人一人の気づきを、学級で交流させ、気づきを共有させることにより、集団としての学習を高めるだけでなく、気づきを質的に高めることができます。話し合い活動を位置づけた授業を意図的につくり、実践してほしいと思います。

(参考文献等)

- ・ イラスト リンク先URL <http://myds.sakura.ne.jp/>
- ・ 文部科学省 「小学校学習指導要領解説 生活編」(平成20年8月)